江戸幕府の彫物大工棟梁和泉・高松両家について

STUDY ON TWO FAMILIES NAMED IZUMI AND TAKAMATSU AS THE MASTER-CARVER WHO BELONGED TO SAKUZIKATA DEPARTMENT OF THE TOKUGAWA SYOGUNATE

伊東 龍一*

Ryuichi ITO

The Tokugawa Syogunate constructed buildings richly decorated with carves, and temples and shrines in the Kanto district also often had carves. In many cases, the carvers engaged in constructing the buildings of the Tokugawa Syogunate. This study deals with the carvers who belonged to the Tokugawa Syogunate. The major clarified factors are written as following.

There were two families named Izumi and Takamatsu in the position as master-carver.

The Izumis was from Senshu in the Kansai district and the Takamatsus was from the Kanto district.

Date of the Izumis activities is from the 3rd years of the Genroku (1690) to the end of the Edo era. Date of the Takamatsus activities is from the 5th years of Genroku (1692) to the 3rd years of Meiwa (1766).

The master-carver was on a level with the carpenter named 'daiku-toryo'. But Izumi yosihisa, Izumi yosiyasu and Izumi yosisuke were raised to the master-carpenter named 'dai-toryo' in the end of the Edo era.

Keywords : carver, carpenter, Edo era

1. 緒言

東照宮をはじめとする日光山内の社寺は彫物（彫刻装飾）を多用しているが、その造営や修理は江戸幕府によって行われた。その作事において彫物を担当した彫物大工棟梁の名は、元禄元年（1690）の岸上加右衛門・同太郎兵衛が初見である。この岸上家は、その後の和泉家につながる事が認められ、以後、和泉家は幕末まで、高松家は元禄5年（1692）以降明和3年（1766）まで、その地位にあった¹⁾。

本稿は、由緒書や過去帳・造営関係史料等を用いて、幕府の彫物大工棟梁である和泉・高松両家について出身地や活動期間、彫物大工棟梁の所属・地位について検討する。

和泉・高松両家の内、和泉家については、すでに坂井犀水『日本木彫史』（タイムス出版社 昭和4年）や大熊喜邦「豊公聚楽第の大広間」（『建築史』2/1 昭和15年1月）が由緒書を用いて簡単な紹介をしており、筆者は、前稿で和泉家由緒書の信頼性を検討し、系譜を明らかにしている²⁾。そこで、和泉家については、前稿の結果を踏まえて、彫物大工としての活動を中心に考察

を進めている。

一方、高松家については、これまで論考されたものがなく、彫物大工としての活動をその系譜をも含めて考察している。

2. 和泉家について

(1) 出身地

出身地については泉州和泉郡和泉であることは由緒書の記述からすでに指摘されている³⁾。由緒書は、和泉家の先祖岸上五良右衛門義忠が泉州和泉郡和泉に住み、義忠の子の義信は同所の生まれで、小右衛門義繁の代の慶長4年（1599）に江戸へ出たと記している。また、義信の菩提寺を貝塚の願泉寺としている⁴⁾。しかし、これらの記事は先に検討した由緒書の必ずしも信頼できるとは限らない範囲にあり、検討を要する。

まず、岩木山神社本殿（青森県）正面軒唐破風内連獅子彫刻の裏面墨書「貞享四乙卯歲卯月中旬 生国泉州貝塚 岸上太郎兵衛作 武州江戸京橋辺住」⁵⁾から、この彫物大工岸上太郎兵衛は泉州貝塚生まれで江戸京橋に住んでいたことがわかる。この太郎兵衛は、貞享頃活躍し

* 東京工業大学 助手

Assistant of Tokyo Institute of Technology

ていたことから考えて、系譜上の太郎兵衛行利（享保9年没 1724）に当たると考えられる。

また、貝塚の願泉寺の住持了観が延享3年（1746）に記した『了観師記 万記録』によると、寛文3年（1663）の御堂再興に当り、貝塚の和泉守が江戸から呼び戻されて棟梁を勤め、彫物を和泉守と共に豊後守・但馬守の三人の兄弟が担当していた⁶⁾。この兄弟は、同寺の住持了真が文化14年（1817）に記した棟札では、和泉の岸上万兵衛の子であるとしている⁷⁾。これより、寛文頃、貝塚に岸上姓の彫物大工の兄弟が存在し、願泉寺の彫物を担当したことになる。由緒書には和泉家が江戸へ出た後も泉州に類縁があったことが記されており⁸⁾、万兵衛や豊後守・但馬守は泉州に残った岸上家の一族であったと考えられる。

願泉寺所蔵『貝塚大工之由緒、大覚寺宮令旨之写、棟梁系図』⁹⁾の「貝塚彫物師」と題された系図には、初名を太郎兵衛といった和泉加右衛門近直が記されており¹⁰⁾、3代加右衛門義乗あるいは太郎兵衛行利に当たる可能性がある。

貞享4年（1687）に新長谷寺本堂（岐阜県）の丸彫の手挟を堺の岸上六兵衛真勝が¹¹⁾、正徳2年（1712）に難波別院本堂（大阪府）の彫物を大阪の岸上五兵衛尉が担当したこと¹²⁾が棟札などから知られ、堺や大阪で岸上姓の彫物大工が活躍したことがわかる。

以上のような諸状況を考え合わせると、和泉出身の彫物大工である岸上家が存在し、江戸へ出て出身地名の和泉を称したことは認めてもよいと考えられる。

（2）歴代当主と活動

和泉家関係で彫物大工の初見は、先にみた貞享4年（1687）の岩木山神社本殿の岸上太郎兵衛である。また、幕府彫物大工棟梁の初見である元禄3年（1690）の日光東照宮修理の岸上加右衛門・同太郎兵衛を姓名や年代からみて和泉家の関係者である可能性が高い。また、由緒書には、甚五郎義信（永禄12年没 1569）の代から彫物大工として活躍していたことが記されている¹³⁾が、この記録は由緒書の5代九右衛門重義条より古い作事関係記事に属し、この部分は史料として直ちに信頼することはできない。しかし、7代忠兵衛貞福以後は他の作事記録と対応できる¹⁴⁾ので、史料で確認できる先の太郎兵衛行利と、これに続く7代忠兵衛貞福（安永2年没 1773）・8代九右衛門義壽（天保14年没 1843）・9代九兵衛良安（弘化2年没 1845）・10代九兵衛義藝（明治15年没 1882）と幕末の数代は幕府の彫物大工棟梁として活動していたと考えられる。また、彫物大工として活動を始めた時期については、史料の信頼性の問題から直ちに由緒書のとおり義信の代まで遡ることはできないが、系譜における初代で江戸時代初期の五郎助吉政（寛永11年没 1634）の代からである可能性が高い。

また、由緒書によれば、8代九右衛門義壽は、彫物大工棟梁と共に、文化4年（1807）7月5日に大工棟梁¹⁵⁾を、ついで天保2年（1831）12月16日に大棟梁並¹⁶⁾、天保5年8月10日の大棟梁を兼任する¹⁷⁾。また、9代九兵衛良安は、天保5年11月2日に大棟梁見習¹⁸⁾、天保12年11月5日にこれを免ぜられ、元の通り彫物御用だけを勤めるようになるが¹⁹⁾、天保14年1月20日には大工頭支配大工棟梁並になっている²⁰⁾。10代九兵衛義藝は天保15年10月18日に彫物方見習²¹⁾、嘉永5年（1852）12月1日に彫物方²²⁾、万延元年（1860）11月5日に大棟梁並になっている²³⁾。これらは、いずれも由緒書の信頼できる範囲にある記録で、すでに8代義壽が大棟梁並及び大棟梁、10代義藝が大棟梁並の地位にあったことは他の史料からも確認される²⁴⁾。

以上より、8代九右衛門義壽、9代九兵衛良安、10代九兵衛義藝と、幕末には3代にわたり大棟梁や大棟梁並、大工棟梁を彫物大工棟梁と兼任する者が出た。

3. 高松家について

（1）出身地

高松家の由緒に関する史料には、菩提寺の祥禅寺の過去帳・墓碑及び蛭川親治氏所蔵の『蛭川家大概略写』（以下『概略』と記す）がある。『概略』は、表紙外題に「蛭川家大概略写 祥禅寺」、奥書に「文政十一戊子年十一月 上野国勢多郡花輪 赤城山祥禅寺（印）」とあり、これらを併せて考えると、原本を祥禅寺が文政11年（1828）に書き写したものと考えられる。内容は、蛭川家からの奉納物・寄付金の書き上げ及び蛭川家（および高松家）の系譜で、系譜の最後に「以上 右は宝暦十三末年」とある所から、系譜が宝暦13年（1763）に記されたことがわかる。

『概略』によれば、当家はもともと蛭川家の出で、蛭川家は蛭川将監の代に上野国に移り住み、続く又左衛門（寛文20年没 1643）・佐右衛門（貞享2年没 1685）は共に沼田城主真田家に仕え、佐右衛門は上州花輪村に住んでいた。高松家初代の又八郎は佐右衛門の子で、寛文頃に江戸へ出て彫物大工となり、そのときに高松又八郎と改名した²⁵⁾。

他の史料をみると、墓碑銘は、初代を又八と記し、江戸神田九軒町に住んでいた²⁶⁾が、この墓のある菩提寺の祥禅寺が花輪村にあることや、蛭川佐右衛門と高松家の墓があることから、遅くとも蛭川佐右衛門以後には『概略』が記すように上州花輪村が先祖以来の縁深い土地になったことは誤りない。一方、関東の彫物大工の系図である『彫工左氏後藤氏世系図』²⁷⁾には、初代又八は上州沼田の生まれとあり²⁸⁾、いずれにしても高松家の初代の出身地は上野国であったと考えられる。

(2) 歴代当主と活動

史料の内、最も信頼できる過去帳によれば、高松家の初代は又八（享保元年2月5日没 1716）、2代は初代の次男の又六（明和6年6月10日没 1769）である²⁹⁾。

また、『概略』は初代から3代までを記し、いずれも又八郎を名乗ったとしているので、2代も又八（郎）を名乗った可能性があり、3代まで継承されたと考えてもよからう。なお、3代又八郎の条には「右又八郎家督相続」とあり、『概略』が記された宝暦13年（1763）には3代又八郎が家督を継いでいたことになる³⁰⁾。

また、関東の彫物大工の系図である『彫工左氏後藤氏世系図』には、又八邦教・又六頼直・又八頼品の3代が記されている。各人の実名の内、初代については戒名にも「邦教」が使われているので誤りはなく、2代・3代についても仮名が一致し、根拠となる史料に基づいて記したと判断されるので、実名についてはこの系図通りであったと考えられる。

4代以後については、過去帳・『概略』あるいは『彫工左氏後藤氏世系図』のいずれにもなく、『彫工左氏後藤氏世系図』の3代又八頼品条に「諸国経歴」とある³¹⁾ので、3代又八（郎）は幕府の作事からも離れ、その後に諸国を遍歴したと考えられ、彫物大工としての家系も3代で絶えた可能性が強い。

すなわち、当家は初代又八（郎）邦教（享保元年没）・2代又六（又八（郎））頼直（明和6年没）・3代又八郎頼品と3代にわたり継承されたが、この3代で彫物大工が絶えた可能性が強い。

次に当家の者が実際の作事に関与した例をみてゆくが、すでに『鈴木修理日記』（東京都立中央図書館蔵東京誌料）の記事によって、元禄5年に高松又八郎が彫物大工棟梁の立場にあったと考えられることは明らかにしている³²⁾。これは年代的に初代邦教であろう。

当家の者が造営記録にみられる初見は、宝永4年（1707）の手力雄神社本殿（千葉県館山市）の「江戸高松又八」³³⁾である。また、幕府の作事における初見は、正徳3年（1713）の芝文昭院霊廟造営の高松又八郎³⁴⁾で、又八郎はこのときには彫物大工棟梁として造営に参加したことになる。年代的にこれらの又八郎は初代邦教と考えられる。また、享保16年（1730）の日光大猷院霊廟の修理³⁵⁾・宝暦4年（1754）の日光東照宮修理³⁶⁾・明和3年（1766）の芝台徳院霊廟修理³⁷⁾にも高松又六が関与している。これらは仮名や年代からいずれも2代頼直に当たると考えられる。このほか『彫工左氏後藤氏世系図』には、初代邦教が厳有院・常憲院霊廟を、2代頼直が有章院霊廟を、3代頼品が惇信院霊廟をそれぞれ担当したと記されるが、年代的にも矛盾しないのでこれらの彫物³⁸⁾をそれぞれが担当した可能性が強い。

以上から、高松家は初代が関東の上州花輪村の出身で

寛文頃に江戸へ出て彫物大工になり、その時期は、遅くとも元禄5年で、正徳3年には幕府の造営に彫物大工棟梁として参加したことが明らかである。しかし、3代までしか継承されず、管見では幕府の作事に関与したのは正徳3年から明和3年までである。これは、和泉家が、その先祖が泉州和泉郡和泉の出身で、元禄3年以後幕末まで幕府の彫物大工棟梁を継承しており、彫物大工をはじめた時期が江戸初期にまで遡る可能性があるのに対し、出身が関東であること、活動期間が短いことにおいて対照的である。

4. 彫物大工棟梁の所属

次に、彫物大工棟梁の所属について検討する。

日光東照宮延享度修理に参加した和泉家7代忠兵衛貞福と高松家2代又六頼直は、『延享元甲子年 日光御宮御仮殿御旅所々御修復御彫物工割帳 御作事方』³⁹⁾に「御宮御仮殿御旅所 彫物大工書出シ 工数 七千三百四拾八人半 彫物大工 高松又六 同 和泉忠兵衛」とあることから共に作事方に所属していたことがわかる。

肩書をみると、天保度の日光東照宮修理に参加した和泉家の9代九兵衛良安は、「御作事方諸棟梁」の中の「御彫物師」⁴⁰⁾で、家屋敷譲渡の書類では「御作事方御大工頭支配彫物方」であった⁴¹⁾。また、同家10代の九兵衛義藝は、元治度西丸造営⁴²⁾においては「御作事方」の「彫物棟梁」で、さらに同家11代の嘉右衛門信義は明治9年の『増上寺御本堂御再建御普請之儀ニ付願書』⁴³⁾によると「元御作事方彫物棟梁」であった。

また、8代義壽や9代良安・10代義藝が作事方大棟梁や大棟梁並・大棟梁見習に昇格していることも考え合わせると、この3代は共に作事方に所属していたと考えられる。

しかし、由緒書によれば和泉家8代の九右衛門義壽は天明6年（1786）の湊明院霊廟の作事、および同年の厳有院霊廟の作事に小普請方として参加していた⁴⁴⁾。由緒書には他に小普請方として作事に関与した例はみられないが、由緒書が主に作事方に提出することを目的として作成されたために小普請方での業績が記されないということも考えられ、他にも例があった可能性がある。また、小普請方に所属した彫物大工棟梁の存在もこれまで確認されていないので、彫物大工棟梁である和泉あるいは高松家が小普請方の作事にも参加したことも考えられる。

すなわち、彫物大工棟梁は、和泉家の7代貞福・8代義壽・9代良安・10代義藝および高松家2代又六が作事方に所属したことが確認され、両家とも代々作事方に属したと考えられる。また、作事方の仕事だけでなく小普請方の作事にも関与していたこともあった。

5. 彫物大工棟梁の地位

『万延度江戸城御本丸御普請記』によると、和泉家 10 代九兵衛義藝は万延度江戸城本丸造営において「彫物棟梁」を勤めており、この時「彫物棟梁」は他の大鋸・鍛冶・鋳・石等の各棟梁と並ぶ棟梁であった⁴⁵⁾。作事方における万延度の組織を示すとされる大島家所蔵の系統図によると、諸棟梁は大棟梁の下に大工棟梁・諸請負人と並んでいた⁴⁶⁾。

したがって、作事において棟梁は大工棟梁とその他の諸棟梁に区別されていて、彫物大工棟梁は諸棟梁の内に含まれ大鋸・鍛冶・鋳・石等の各棟梁と同格で、大工棟梁と並ぶ位置にあった。

また、幕末の和泉家には大棟梁や大工棟梁を兼任するものがいた。

大工棟梁や大棟梁並・大棟梁などを兼任後の作事において、彫物大工出身の和泉家の各代がどのような役割を果たしていたのかは詳細に知ることはできないが、由緒書の 8 代義壽条をみると、大工棟梁兼任当時の記録として、

文化 12 年 (1815) 条

増上寺 玉樹院様御廟御用奉相勤候 大工方

文政 6 年 (1823) 8 月条

文政六癸未年八月 日光山 御普請先御見分御用奉相勤候 大工方

とあって、「大工方」を明記する作事記録⁴⁷⁾が、彫物を担当した記録の他に加わっている。大工棟梁として彫物以外の作事に参加したことが窺える。

また、大棟梁並兼任当時の天保 3 年 11 月 25 日条には、増上寺 安国殿御宮御修復御用掛惣被仰付野扶持方七人扶持被下置、御彫物御 用共被仰付奉相勤候とあり⁴⁸⁾、この作事の担当は、作事全体と共に彫物にも及ぶものであったことがわかる。

大棟梁並や大棟梁となった後は、この天保 3 年の記録ほど明確ではないが、「普請」・「修復」・「模様替」などだけ話され、「御彫物御用」などと特記されない作事記録が続いており、8 代義壽は大棟梁として設計・管理に携わっていたと推定できる。

一方、高松家は、初代又八邦教以前には大工等の工匠とは縁のない家柄で、彫物以外の工事に携わったりすることもなかったと考えられる。

6. 結 語

彫物大工棟梁の 2 家の内、和泉家の先祖は和泉国和泉の出で、貞享 4 年頃から彫物大工として活躍していることが確認でき、幕府の工事では元禄 3 年の日光東照宮修理にすでに関与していた。さらに彫物大工としての活動は江戸初期まで遡る可能性が強い。そして代々この職を継承し幕末まで続いている。

一方、高松家は初代が上野国の花輪村の出身で、彫物大工として活躍するのは早くても寛文頃遅ければ元禄 5 年頃からと考えられ、彫物大工としての系譜は江戸初期にまで遡らない。また、初代の後に彫物大工を継承したのは 3 代までであって、明和 3 年の芝台徳院霊廟修理後まもなく幕府の工事からも離れたと考えられる。これらの彫物大工棟梁は平常、作事方に所属していた。その地位はほぼ作事方大工棟梁と同格で、幕末の和泉家からは九右衛門義壽・九兵衛良安・九兵衛義藝の 3 代にわたり作事方大棟梁や大棟梁並・大工棟梁を兼任する者が出た。大棟梁として設計・監理の仕事をもめたと推定できる。

なお、彫物大工棟梁の 2 家と関東各地の彫物大工との関連について次稿で述べたい。

注

- 1) 拙稿「江戸幕府の作事において彫物を担当した工匠の変遷と彫物大工棟梁の確立」(日本建築学会計画系論文報告集 411 号, 1990 年 5 月)
- 2) 「江戸幕府彫物大工棟梁和泉家の由緒書について—史料としての信頼性の検討—」日本建築学会計画系論文報告集, 408 号, pp. 111~112, 1990 年 2 月
- 3) 大熊喜邦「豊公聚楽第の大広間」(『建築史』2/1, 昭和 15 年 1 月)
同家(和泉)の由緒書に依れば祖先は泉州和泉郡和泉住岸上五郎右衛門源義忠で永正大永の比足利氏に仕へたる人である。
- 4) 出身地については、由緒書 F・H・K・L・M が記しており、義信の菩提寺についてはこの内の F・H・K・L・M が記している。

例えば由緒書 F では、

本国泉州和泉郡和泉住

足利義植公仕、大永年中

岸上五良右衛門源義忠

(中略)

義忠次男泉州和泉郡和泉産

番匠彫工祖

岸上甚五郎左義信

(中略)

信政長男小三郎改慶長四年より

江戸住居

七代目

岸上小右衛門義繁

(下略)

とあり、

また、H には、

泉州和泉郡和泉国住

岸上五郎右衛門源義忠

代々足利家仕、永正大永頃

義忠末子五男

岸上甚五郎義信

永正元年甲子年三月五日誕生、永禄十二巳己年六十六歳卒寺ハ泉州和泉郡貝塚村願泉寺、十歳之節より日々山林ニ入、職分修行いたし夜々彫物等迄修行いたし十

- 六歳之節大和国多武峯十三重塔建之，泉州堺妙国寺門建之，墓股猿彫物彫刻之，伏見岩清水八幡宮拜殿建之，彫物共彫刻之，火防之法致候哉，今ニ連綿ニ御座候とある。
- 5) 【重要文化財 岩木山神社本殿外四棟修理工事報告書】昭和53年
- 6) 【了観師記 万記録】(『日本都市生活史料集成九 門前町篇』学習研究社 1977年所収)
- (前略)
- 一、同(御堂)再興寛文三年癸卯年 寺内門徒近在門徒助成 八十八年二成
- (中略)
- 一、彫物 和泉守豊後守但馬守兄弟
- 一、御堂御拜ノ上天人ノ彩色彫物ハ古堂ノ時より作者不知
- 菊籠彫ハ和泉守，外ノ彫物ハ先和泉ノ差図ニテ其
- 時分ノ上手共ニ彫セ候，和泉細工ト云テモ不苦御堂再興ノ棟梁ハ和泉守ナリ，別帳ニ委記アリ，和泉ハ貝塚ノ産，後江府へ参，再興ノ節呼ニ遣来
- (下略)
- 7) 願泉寺蔵持仏堂棟札に，
- (表)「持仏堂彫物 北松藤 和泉守貞由作
中華鬘 豊後守定勝作
南松椿 但馬守定吉作」
- (裏)「右三作當国南部三松村之産岸上万兵衛長男但馬守定吉次男和泉守貞由三男豊後守定勝三子貝塚住居
文化十四丁丑歳持仏堂再造之時記之
ト半十世了真 花押」
- とある。文化14年(1817)の持仏堂再建に当り，以前の彫物を再利用する際に記されたと考えられる。
- 8) 由緒書F。9代義一次男但馬条に「岸上但馬 幼年之節泉州岸上甚十郎跡目養子に罷成候」とあり，泉州に岸上家が存続していたことを示している。
- 9) 「天保十一庚子年八月 表紙附の十八冊之内」と端裏書にあるので天保11年以前に記されたものである。最初に「貝塚彫物并大工由緒書」が記され，続いて「貝塚彫物師」と題された系図がある。「貝塚彫物并大工由緒書」の最後に，「宝暦十一巳年極月日 泉州貝塚彫物大工 岸上武左衛門周房」とあって，宝暦11年(1761)に泉州貝塚の彫物大工の岸上武左衛門周房が由緒を記していることがわかる。系図の書体は前の由緒書と同一と判断できるので，この系図も由緒書と共に宝暦11年に岸上武左衛門によって記されたと考えられる。
- 10) 岸上万兵衛次男の和泉守貞由の孫に「加右衛門近直初名太郎兵衛 実富久仁助男」とある。また，佐野五兵衛の条に「和泉加右衛門近直女兄弟之子」とあって，加右衛門近直は和泉姓を名乗っていたことがわかる。和泉守貞由は同書の他の箇所でも「今之御堂願泉寺者寛文三年岸上和泉守棟梁時八十一歳後於江戸死去」と記されていて，岸上姓を名乗り，寛文三年に81才の高齢であったことがわかるので，孫の加右衛門の活動年代は17世紀後期と考えられる。
- 11) 向拝手扶上端墨書(『重要文化財 新長谷寺本堂修理工事

報告書】昭和28年)

貞享四丁卯三月廿六日

奉行金剛院亮範十六世

泉州堺大島郡大工町三丁目彫物師岸上市郎兵衛真勝

- 12) 【輪番所日記】(『難波別院史』難波別院史編纂委員会編昭和53年)

(前略)

○彫物市 大坂 岸上五兵衛尉 京 清

水安之丞尉 京 長谷川與右

衛門尉 京 丸山新之丞

とある。この内，丸山新之丞は，谷直樹『中井家六箇国大工支配の成立と展開に関する研究』(私家版 昭和58年9月)が元禄5年(1692)当时中井家配下の棟梁で，延宝4年(1646)に誓願寺厨子の彫物を，宝暦6年(1756)には西本願寺本堂御拜の象鼻を請負い，代々彫物大工として活躍したことが知られるとする丸山新之丞に当たると考えられるので，大坂の岸上五郎兵衛尉も彫物を担当した彫物大工と考えられる。『貝塚大工之由緒，大覚寺宮令旨，棟梁系図』(願泉寺蔵)にみえる，和泉守貞由姪(ママ)五左衛門の子の「駿河 五兵衛，大坂住，享保五年大坂西御堂門出来之時受領」は，この五兵衛に当たると考えられる。

- 13) 由緒書H・K・L・M，注4) 参照
- 14) 前掲「江戸幕府彫物大工棟梁和泉家の由緒書について—史料としての信頼性の検討—」
- 15) 例えば和泉Q，義壽条
同(文化)四卯年七月五日日大工棟梁職被仰付彫物方兼相勤候様，御作事奉行岩瀬加賀守申渡候旨，御大工頭和田源助申渡
- 16) 例えば由緒書Q，義壽条
同(天保二)年十二月廿六日出精相勤候ニ付大棟梁並被仰付御扶持方三人扶持被下置彫物方は迄之通相勤候様，水野出羽守殿御書付を以被仰渡候段於中之御廊下御作事奉行須田大隅守申渡
- 17) 例えば由緒書Q，義壽条
同(天保)五年八月十日年来出精相勤候ニ付大棟梁被仰付御扶持方七人扶持増被下置，都合拾人扶持成下候旨，大久保加賀守殿御書付を以被仰渡候段御作事奉行神尾備中守川井長門守申渡且彫物職之儀も是迄之通相心得候様被仰渡
- 18) 例えば由緒書Q，良安条
天保五午年十一月二日大棟梁見習相勤候様松平周防守殿御書付ヲ以被仰渡候段御作事奉行神尾備中守殿申渡
- 19) 例えば由緒書Q，良安条
同(天保十二)年十一月五日日大棟梁見習差免，前々之通御彫物御用可相勤候旨，水野越前守殿御差図ヲ以被仰渡
- 20) 例えば由緒書Q，良安条
同(天保)十四卯年正月廿日 右御用真実格別出精致冥加之御奉公相勤ニ付，御作事奉行石河土佐守殿御書之御褒詞下置，水野越前守殿御差図請御大工頭支配大工棟梁並被仰付
- 21) 例えば由緒書Q，義壽条
御本丸御普請初度御用中天保十五辰年十月十八日御彫物見習被仰付
- 22) 例えば由緒書Q，義壽条

- 同（嘉永五）年十二月朔日父仰職彫物方被仰付
- 23) 例えば由緒書Q, 義藝条
同（万延元）年十一月五日 御本丸御普請御用精入骨折相勤候ニ付、大棟梁並被仰付御扶持方七人扶持下置候旨、久世大和守殿御書付ヲ以被仰渡候段、御作事奉行松本駿河守殿申渡
- 24) 前掲「江戸幕府彫物大工棟梁和泉家の由緒書について—史料としての信頼性の検討—」
- 25) 【概略】によれば、将監の条に、
昔時大徳寺之宮附ニ而、上野国佐渡之渡り江引移ルとあり、又左衛門の条に
蛭川又左衛門 寛永廿癸未十二月廿八日當寺江葬ル
法名円修院山叟陽雲居士
右上州沼田城主真田阿波守殿ニ仕ヒ知行二千石
佐右衛門の条に
蛭川佐右衛門 貞享二乙丑三月廿三日卒 當寺江葬ル
法名了性院鎖雲雍閑居士
右同真田阿波主殿ニ仕ヒ知行七百石干後上州花輪村ニ住居ス
佐平太の条に、
蛭川佐平太 享保元丙申閏三月五日卒、當寺江茂廟所有之
法名伝心院外空邦教居士
右寛文年中江戸江罷越彫物職を請、高松又八郎と改名、公儀御用達と成、浅草今戸慶養寺江葬ルとある。
- 26) 祥禅寺墓碑に、
江戸神田九軒丁居住御彫物屋棟梁俗名高松亦八當亦八□□巳とある。
- 27) 東京国立博物館蔵
緒言に、
一、世系者先人之記所、從左氏元禄以前之人、而其後不記、亦先師未審者間有、尚本国住所迄悉改正、而後人伝、雖然筆走順逆可有、猶誤多事後訂正俟、而已
于時文化七龍集庚午仲夏吉辰
東都彫工匠
後藤惣八正常
行年七十六
とあって、元禄以前の彫物大工について記した系図を基に文化7年（1810）に江戸の彫物大工後藤惣八正常が著わした系図であることがわかるが、実際には明治期に活躍した彫物大工名まで記されており、その後明治期にも補筆があったと考えられる。ただし、同史料は同一人の手によって一度に記されたもので、原本の写しであると考えられる。
- 28) 初代邦教条に、
邦教 俊元門人高松又八上州沼田産
江戸九軒町住
巖廟 御用勤
憲廟
とある。
- 29) 過去帳には、
蛭川氏霊位 先檀當寺檀那又八代ヨリ江戸神田九軒丁居住。御本丸彫物棟梁相勤 又八方（より）高松氏改
（中略）

- 一、伝心院 外空邦教居士 享保元丙申二月五日俗名高松又八事佐右衛門子、御本丸彫物棟梁
- 一、円照院 大安智鏡大師 宝永甲申五月二十三日高松又八妻
（中略）
一、祖山教意居士 明和六丑年六月十日高松又六事先又八二男
（下略）
とある。
- 30) 【概略】については、初代は注25)の通りで、2代については、
本名蛭川氏
高松又八郎 先又八郎次男藤五郎舎弟也
正徳三巳年より御彫物御用相勤、今以相勤候
3代については
二代目又八良嫡子
高松又八郎
右又八郎家督相続
とある。
- 31) 【彫工左氏後藤氏世系図】には、初代邦教の条（注28）に続いて、
2代頼直の条に
頼直 邦教男 二代高松又六
神田九軒町住後二下谷金杉町死
章廟之御用勤
3代頼品の条に、
頼品 頼直男 三代目高松又八
諸国経歴
惇心院様御廟御用勤
とある。
- 32) 前掲「江戸幕府の作事において彫物を担当した工匠の変遷と彫物大工棟梁の確立」
- 33) 修理銘札
- 34) 【正徳三年癸巳三月より五月迄 増上寺御普請公儀請負町人切手留帳】（岡山大学附属図書館蔵）に
一、同（銀）五拾貫目 彫物大工作料
内訳 高松又八郎、中村新三郎、今泉彦八郎切手
彫物大工飯米
右三人之切手
- 35) 【享保十六年 日光御霊屋御修復御入用御勘定帳御勘定所】内藤家文書（明治大学刑事博物館蔵）に、
一、銀壹貫八百六拾四匁五分 彫物大工作料
彫物大工
高松又八
とある。
- 36) 【在国 日光御宮御修復御用留控】蜂須賀家文書（国立史料館蔵）。寛延あるいは宝暦といった年紀や、大棟梁辻内豊後・大谷甲斐の名がみえることから一見して宝暦度修理の記録とわかり、この内に
彫物大工 高松又八 同 和泉忠兵衛
とある。
また、この他に【御宮御上棟之節諸棟梁并行列書】蜂須賀家文書（国立史料館蔵）に、
素袍 棟梁 高松又八

とある。

- 37) 【安永七戌年十一月 紅葉山御霊屋御修復記 四】(増上寺蔵)中に、紅葉山霊廟の修復棟札の参考として明和3年(1766)の台徳院霊廟修理の棟札写しがあり、ここに彫物大工 高松又六 和泉忠兵衛とある。
- 38) 棟札等によれば、厳有院霊廟は天和元年(1681)造営、元禄11年(1689)焼失、同12年再造営。常憲院霊廟は宝永6年(1709)造営。有章院霊廟は享保2年(1717)造営である。
- 39) 松平文庫(福井県立図書館蔵)
- 40) 【御宮御修復掛り御役人附 文政十四年より天保三年迄全】(栃木県立図書館蔵)
- 41) 「一、家屋敷譲請度御添翰願」(『撰要永久録』、『東京市史稿』市街編43 昭和31年所収)に「嘉永四亥年正月廿三日」の年紀と共に「御作事方御大工頭支配彫物方泉九兵衛」とあり、年代的にこの九兵衛は9代の良安と考えられる。
- 42) 「江戸城仮御殿御表向御中奥向大奥向総地絵図」(東京都立中央図書館蔵)
奥書に「元治元甲子年十二月 大棟梁 甲良筑前控(印)」の年紀と署名をもつこの絵図に記された「御普請御用掛名面」の「御作事方表掛」の中に「彫物棟梁 和泉但馬」とある。
- 43) 和泉家蔵。表紙に「元御作事方彫物棟梁」とある。
- 44) 和泉家由緒書Q, 8代九右衛門義壽条
天明六丙午上野 湊明院御廟御霊屋御彫物奉相勤井上野紅葉山共、大猷院湊明院御宮殿御須彌壇并仮御宮殿御須彌壇并御用向於小普請方奉相勤候。

- 45) 【万延度江戸城御本丸御普請記】(『東京市史稿』皇城編三大正元年所収)

「御普請御用掛名面」の「諸棟梁」条に、

大鋸棟梁	桜井肥後	鍛冶棟梁	高井伊豫
鋸棟梁	松井近江	石方棟梁	亀岡石見
石方	石津伝十郎	彫物棟梁	和泉但馬

(下略)

とある。

- 46) 田辺泰「江戸幕府作事方職制に就いて」建築学会大会論文集 昭和10年4月

系統図は、その末に「右万延度御普請之節手続」とあり、甲良家12代大島盈株氏が筆録されたもので、おそらく大島氏が作成されたものとされている。系統図は次のとおりである。

- 47) 由緒書Bの義壽条。条同様の記録が由緒書A・C・H・K・L・Mにある。
- 48) 由緒書Qの義壽条。同様の記事がE・J・K・L・M・P・R・Qにある。

(1990年1月10日原稿受理, 1990年5月28日採用決定)